

フィクションとしてのクオリア：不可謬性論証を定式化する

篠崎大河 (Taiga Shinozaki)

慶應義塾大学

意識の哲学において、消去主義の後継として錯誤主義(illusionism)と呼ばれる立場が近年勢いを増している(Frankish 2017)。それは、現象的性質(クオリア)の存在を否定し、それをなんらかの錯誤として説明する立場である。そこにおいて従来の問題設定である意識のハード・プロブレム(Chalmers 1995)は疑似問題として棄却され、代わりに、意識は存在しないにも関わらずなぜ存在するかのように思われるのか、という意識のイリュージョン・プロブレムが取り込まれる。

このような錯誤主義の主張の中心には、現象的性質は、我々が存在していると思っただけで、本当に存在しているわけではない、という考えがある。これに対する反論として、現象実在論者はしばしば、現象的信念の不可謬性に訴える。それは、自分の現象的意識についての内観的信念、すなわち現象的信念は不可謬(infallible)であるという主張である。このような主張は、痛みの例によって直観的に支持されるだろう(Searle 1997: 112; Kind 2022)。自分が今、痛みを感じているということについて我々は誤りえないように思われる。そして、現象実在論者はこれをもって現象的性質が存在することは自明であると結論する。なぜなら、彼らによると我々の(少なくとも特定の)現象的信念は不可謬なので、我々がある現象的性質が存在すると(少なくとも特定の仕方)信じれば、その信念自体がその現象的性質が存在することの決定的な証拠になるからである(Searle 1997: 112, 121-2, 124; Chalmers 2010: chap. 9; Succhi & Voltolini 2017: 32; Niikawa 2021: sect. 5.5, cf. Kripke 1981: 154; Frankish 2017: sect. 3.2)。ここにおいて、現象的信念の不可謬性は、錯誤主義を論駁し、現象実在論を支持するものと考えられている。

しかしD. デネットによると、現象的信念の不可謬性は現象実在論を支持するどころか、むしろそれを否定し、逆に錯誤主義を支持する理由になる(Dennett 1988: 55, 1991: sect. 4.4)。というのも、フィクション作品の記述がその登場人物について不可謬であることが、登場人物が存在せず、フィクショナルであることで説明できるのと同様に、ある信念がある対象について不可謬であることは、その対象が存在せず、フィクショナルであることで説明できるからである。存在するものは、それについての信念とは独立にそのあり方が世界の側で決まっているため、それについての信念は可謬であるのが普通である。一方、フィクショナルなものは、そのあり方を定めるのは特定の信念(あるいは他のなんらかの表象状態)であるため、フィクショナルなものについての信念とそれが定めるフィクショナルなもののあり方が一致するのは必然的である。それは、『罪と罰』のラスコーリニコフについての記述が、ラスコーリニコフのあり方と一致するのが必然的であるのと同様である。我々の現象的信念は、現象的性質がフィクショナルであるがゆえにそのあり方を不可謬な仕方決定することができるのである。このようなデ

ネットの説明を、本発表では現象的信念の不可謬性に関する「フィクション説」と呼ぶ。

フィクション説のアイデアを用いると、現象的信念の不可謬性から錯誤主義を擁護する論証を構成することができる。それをごく簡単に定式化するならば次のようになるだろう。(1)現象的信念は不可謬である。(2)現象的信念が不可謬であることの最良説明は、現象的性質がフィクショナルであることである。したがって、(3)最良説明への推論により、現象的性質はフィクショナルである。

この論証は錯誤主義を支持する論証のうちで重要なものの一つでありながら、デネット自身によっても十分に検討されているようには思われない。しかし、意識の哲学において現在も注目の的となっている錯誤主義がいかに擁護されうるかを理解するために、これを検討することは有益であるように思われる。

そこで本発表では、この論証を「不可謬性論証」と呼び、その正確な定式化を試み、その可能な反論に応答する。本発表が特に焦点を当てるのは、不可謬性論証の第二の前提（現象的信念が不可謬であることの最良説明は、現象的性質がフィクショナルであることである）である。これを擁護するために、本発表ではまず現象的信念の不可謬性の現象実在論者による可能な三つの説明を検討する。すなわち、第一に、意識経験が存在するという信念は「世界が存在する」あるいは「私は存在する」というような信念と同様にその内容が根本的な事実であるために不可謬である、というような説明、第二に、現象的信念が不可謬であるのは、現象的信念が、その内容となっているところの現象的性質によって部分的に構成されているからである、というような説明、第三に、現象的性質という語の定義上、それが例化されているという内容の信念をある主体が持つことは、それが実際に例化されていることを含意する、という説明である。ついで、これら現象実在論的説明が全て問題を抱えていること、そしてそれらの問題をフィクション説が回避できることを示す。

Chalmers, D. (2010). *The Character of Consciousness*. Oxford University Press. (『意識の諸相』上・下、太田紘史、源河亨、佐金武ほか訳、春秋社、2016年。)

Dennett, D. (1988). "Quining qualia" *Consciousness in Contemporary Science*. A. J. Marcel & E. Bisiach (eds.), Clarendon Press, pp. 42-77.

——(1991). *Consciousness Explained*. Little, Brown. (『解明される意識』山口泰司訳、青土社、1998年。)

Frankish, K. (2017). "Illusionism as a Theory of Consciousness" *Illusionism: As a Theory of Consciousness*. K. Frankish (ed.), Imprint Academic, pp. 11-39.

Kind, A. (2022). "Introspection" *The Internet Encyclopedia of Philosophy*. <<https://iep.utm.edu/introspe/>>

Kripke, S. (1981). *Naming and Necessity*. Blackwell.

Niikawa, T. (2021). "Illusionism and Definitions of Phenomenal Consciousness" *Philosophical Studies*, 178. Springer, pp. 1-21.

Searle, J. (1997). *The Mystery of Consciousness*. The New York Review of Books. (『意識の神秘——生物学的自然主義からの挑戦』菅野盾樹監訳、新曜社、2015年。)

Succhi, E. & Voltolini, A. (2017) "Against Phenomenal Externalism" *Crítica*. Instituto de Investigaciones Filosóficas.